

神奈川文芸賞 [2022]

現代詩部門：大賞

故郷喪失／岡部晋一

旧津久井郡日連村
山々は少年を冒険に誘い
清流は少年を河童にした
少年を育てた故郷は
今は地上にない
永遠の眠りを
人造湖底に閉じた

少年は喪失した故郷の幻影を
永遠に追い続けた
日照りの続いたある年の夏
父は湖岸に立ち
故郷の少年に戻り
哀れな故郷の廃墟を湖底に見た
少年の故郷へのメルヘンは
無惨に打ち碎かれた
その日以来父は
廃墟の故郷を語らなくなつた
その後父は七十二歳の生を終え
天国へ駆け去つた
いや天国へは行かない筈だ
湖底の村へ
帰つて行つたに違ひない

令和四年春
僕は湖岸に立ち父の行方を追つた
父が湖底の山で鬼を追い

伯父は十代の「JUN」町を出て、今は九州の大学で教授をやっていると祖母が言っていた。ほとんど帰ってきていないので、会ったのは数えるほどしかない。毎年、子どもたちと一緒に写った年賀状だけが送りてくれる。

「もうあいつは帰つてこないんじゃないかな？」

祖母は出かけていると、伯父は電話越しに誰も言わなかつた言葉を口にした。

「必ず帰るって言つてました」

「そんのは何とでも言える。あっちで悠々暮らしてるかもしないな」

「そんなこと、ないです」

せつたいに、と言つてから、どうして言い切れるのかと自問した。伯父が言うように、父は僕たちを忘れたのかもしれない。具合が悪いなんて、嘘かもしれない。大海を泳ぐ獲物を追う達成感のある仕事と、世界中の国々。しみつたれた港町に残してきた息子たちなど、どうに父の頭にはないのかもしれない。

「父から連絡あつたんですね？」

「ないね。俺、あいつが漁師になるとかい始めたとき)にちゃんと止めたんだよ。お前には無理だつて。まああいつは自業自得だけど、子どもがかわいそうだよなあ」

僕が何かを答える前に、もうともう伯父の中では正解が決まつてしまつている。「僕たちは大丈夫です」と打ち消すと、はつ、と伯父が短く笑つた。「高校生なら現実見ないと」

憐憫、正論、嘲笑。言葉が目の前に濁流となって押し寄せてくる。斎藤さんの言葉が僕の足をとらえる。伯父の言葉が僕の足をとらえる。他人の言葉に両手両足をつかまれて、僕はもう溺れてしまつそうだ。

伯父の話が終わる前に電話を切った。無数の手からすり抜けるように、身をよじって走り出した。もう誰の言葉にもつかまりたくない。つかまらない。父に会いたい。玄関を開けて日の出通りを走って銀座通りを抜け、花壇岸壁へ出た。

「ねー！　どこ行くのー！」

うしろから誰かの足音がついてくる。振り向かなくてもわかる。僕は吸い寄せられるように岸壁沿いに立つ待合所に駆け込んだ。待合所は、船を見送る家族が過ごす小屋だ。何度かここで船を待った。中にあるベンチになだれこむように座ると、修が滑り込んできた。

「どうしたの。さっきの電話何？　誰から？」

「ちゃんとが心配してると」
「いつの間にか修と寝ていたみたいだ。帰るぞ、と
修を起しそうとするかつちゃんを制して「お願ひがある」と僕は身を起した。
「なに?」
「修に、さりげなく親父から連絡があつたって言った」「え! あつたのか!」「ないよ」かつちゃんは乗り出した身をびたりと止めて、僕をまっすぐに見た。「ないし、これからもしないかもしない。でも、」
視線を流さず、かつちゃんは言葉の続きを待つて居る。「親父からは連絡がきてるってことにしていいれないか。僕と一緒に嘘をつけられないか。今帰れないだけだって。遠くで仕事をしていく、帰る日を待ち望んでるんだって。頼む」
父に捨てられたと感じたり、たぶん修は「われる」走って転んで、今度こそ深い闇に落ちる。僕は隣で眠っている修を見た。呼吸は深く穏やかだった。口をうつすら開けて、微笑んでいるように見える。ただただ、それを壊したくなかった。信じられるだけを信じていたかった。
かつちゃんは笑って、僕の隣に腰掛けた。
「いいよ」

少年を育てた故郷は湖底に沈んだ。少年とは「僕」の父だ。過ぎ去った風景と子ども時代の父、晩年の父とその死を、「僕」は想像と回想のうちに見つめる。父が語らなかったことも多いだろう。沈黙を詩が追いかける。「レモンスカッシュの湖水」がさわやかで、寂寥感と哀愁の漂う世界に少しの清々しさを与えていく。最後の簡潔さは大胆なほどだが、この詩においては説得力がある。相模湖の記憶をめぐって書かれた、心に響く作品だ。

「わるだく」や「知ったる」度と「を聞いてくれない」もしない。

その裏で、僕は密かに父を探していた。

修学旅行先で父に似た人がいたら、何度も足をもめて確認したし、新聞で船や漁師の話題があればまなく読んだ。水産加工工場のホームページに亘っている職員に、父に似ている人を見つけて、写真を拡大して確かめた。

心配をかけまいと慎重にしていたはずだったために、僕らの嘘は修にばれた。

学校のパソコンで調べてから家に帰ると、修は「れ」と言って祖母の読み終えた新聞を持つてきた。修が指したのは、読者投稿欄だった。僕が何度も途まで読んで、「あのな」と修の隣に座った。「修、よく見てみろ。名前が（）に書いてあるだを通していたページだ。

ばれていたのか。父から連絡がないことも、僕こつそり探していたことも。脱力しながら受け取って、投稿を読んだ。『漁師、幸田賢治、四十八』途中まで読んで、「あのな」と修の隣に座った。「修、よく見てみて。名前が（）に書いてあるだ？」

修は漁師という言葉だけを見て言ったのだとう探してくれてありがとな、と新聞を返すと、「わつてるよ。連絡ないこと」と修が顔を上げた。「この人だつたらいいなって思ったんだよ。父さんがこの人だつたらつて。ただ、それだけ？」

三百六十五日いろんな感情が巡った。

どうしてと責めたり、もう帰らないだろうと語ったり、もう一度会いたいと願つたり、許せないと思つた。人が亡くなつたとき、水曜日には泣いて曜日には笑つたりするように。

父は今、静寂の中にいるだろうか。雨のようなが降る、海の上に。

高校を卒業して、僕はアルバイトで学費を貯めから一年遅れで大学へ通い始めた。修は中学生につた。授業とアルバイトを終えて、酔っ払いにまねながら英語のテキストに顔をつづめて電車でり、夜は死んだように眠つた。家に帰ると、修がちくちくとびれて居間で寝ていた。

カレンダーは廊下の壁で埃をかぶり、僕も修もいつしか父の話題に触れなくなつた。思いが薄れ思つた。人が亡くなつたとき、水曜日には泣いて曜日には笑つたりするように。

修が高校に上がつたころ、かつちゃんは魚屋をいだ。祖母がその年の夏に亡くなつた。

東京の貿易会社に就職が決まつても町を出る、をためらつている僕に、「修なら弟みたいなもんから」とかつちゃんは背中を押してくれた。僕は内にちいさな部屋を借りて、修は漁港でアルバイトを始めた。

たいしたもの食べてないんだ。母親みたいなとを言って魚を送つてくるようになったのはそれらだ。二度引っ越しても、変わらなかつた。

僕はもう、父を探すのをやめた。

＊

三崎口の駅に着いてロータリーを見回す。プツクラクションが鳴り、振り向くと白いワゴンからつちゃんが顔を出して手を振つていた。挨拶もそこに助手席に乗り込む。

「ぎりぎりだな」

「さてはろくに寝てないんだよ？」

「なんでわかるんだよ」

かつちゃんは「それ飲んでいいよ」と視線を落とした。ドリンクホルダーには缶コーヒーがセッティングしてある。僕の睡眠不足を見越してくれていたんだ。なんて、なんてできた友人なんだろう。僕は恵まれている。不安だらけだったのに、不思議だ。なぜかすべてに感謝がしたくなつた。

修は今日、初めての漁に出る。

高校を卒業した修は、漁港のバイトをしていたときの縁で船に乗ることになった。短い漁だとはいえたからメッセージがきたとき僕は戸惑つた。修はどうやら何かを取り出した。「なんか大事なものっぽいから、帰つたら渡しておいて。俺見送つたら仕事に戻るんだ」

「そういうえばこれ、修の荷物の近くに落ちててさ」引橋で赤信号になつて、かつちゃんがダッシュユーズードから何かを取り出した。「なんか大事なものっぽいから、帰つたら渡しておいて。俺見送つたら仕事に戻るんだ」

僕に渡したのは、折り畳まれた新聞だつた。ずいぶんと年季が入つていて、といひどしきれいでいたり水を吸つてよれていた。

「見る？」とかつちゃんは車内ライトをつけてくれたが、僕は乗り物酔いがひどいのだ。あとで確認するよと言つてリュックに新聞をしました。

ワゴンはゆるやかな坂を下つて港に着いた。かつちゃんに促されて先にワゴンを降りる。ほのかに空が明るくなつていた。

港にはたくさんの船が停泊していた。漁を終えて戻つてくる船のその先で、港の出口に電気をついている一隻があつた。駆け寄つて、甲板に立つ背中に叫ぶ。

「修！」

振り向いた修と、視線がぴたりと合つた。修は笑っていた。何か言つてゐるけれど声は聞こえない。遅せえよ、ともありがとうとも言つてゐるようになれる。一点の曇りもなく笑つてゐるのを見たら、何でもいいやと思った。もういい。もう、いいだらう。根を張つていた感情が、すつと抜けていく。

追いかけてきたかつちゃんが着くと、船の汽笛が鳴つた。

「ボー、ボー、ボー。長音3回。見送りありがとう。さよなら。

「どういたしました」

僕はつぶやいて、大きく振り返す。父を追いかけた岸壁を走つた、幼い頃の修を思つた。もし修が冒つてこなかつたら。もう二度と会えないとしたら、修から漁に出たいと聞いたとき、僕は何度も考えた無理だ。父だけでなく修までうしなうなんて、耐えられそうにない。だから僕は修に、もうちょっとよく考えてくれと言つた。修の気持ちは変わらなかつたけど。

でも今は少しあがう。込み上げてくる不安を、まとめて胸に下ろすことができない。

父と、僕と修。僕らは同じ船に乗つていて。かつちゃんも乗つてくれた。別々の船になつたとしても同じ海だ。誰かと乗つたり見送つたり一人になつたりして、人生は続く。僕も修も。きっと父も。

講評 朝井リョウ

まるで長編を読んだかのような読後感でした。特に終盤は、三十枚という
程度で辿り着けるとは思えない総量の感情が、ひとつひとつの言葉じゅうに
満ちていると感じました。「船はのっそりと動いているのに、手元のテープ
はすごい勢いでちいさくなっていく」という一文を読んだとき、主人公の目
に映る広大な情景と主人公自身のあまりの無力感がビタッと肌に張り付くよ
うに伝わり、痺れました。このような、小説と読み手の心身が接着するよう
な文章が数多く見受けられ、それらがいちいち効果的でした。そして、一線
上ではなく、決して交わらない位置で発生した物事が互いに作用することで
不思議と落とし所のようなものが見つかるというラストからは、非常に深い
納得感を受け取ることができました。タイトルもこれ以外ないというぴった
りさ。素晴らしいです。